様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３３２０１６６

研究課題名（和文）擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動

研究課題名（英文）Research on the Interaction and Social Change of Coastal Areas of the Sea of Okhotsk in the Satsumon Culture

研究代表者
熊木　俊朗（Kumaki, Toshiaki）

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：２０２８２５４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,000,000円

研究成果の概要（和文）：擦文文化期における地域間交流や社会変化の様相を解明するため、北見市大島2遺跡にて擦文文化の竪穴住居跡の発掘調査を実施した。大島2遺跡は標高の高い尾根上というやや特異な環境下にあり、低地や砂丘上にある他の集落とは異なる性格を有することが予想されたが、発掘調査の結果、海獣狩猟や動物儀礼、住居の廃絶儀礼、建築木材の選択、木製品の様相などに、オホーツク文化やトビニタイ文化との関連を思わせるような特徴が認められることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In order to elucidate the aspects of the inter-regional exchange and social change in Satsumon culture, we carried out excavations of the pit dwellings of Satsumon culture at Kitami Oshima 2 site. Oshima 2 site is under somewhat peculiar environment of high altitude ridge on, but from the other settlements that are on the lowland and sand dunes have been expected to have different characteristics. As a result of excavation, it became clear that a characteristic to hark back to connection with Okhotsk culture and the Tobinitai culture in marine mammal hunting and animal rituals, the extinction rituals of the pit dwellings, choice of the building wood, the aspect of wooden goods.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　擦文文化　北海道　環オホーツク海地域　オホーツク文化

１．研究開始当初の背景

日本列島の北方史における大きな転換点が 10-13 世紀、すなわち古代から中世への移行期にあることが、近年の考古学と文献史学の研究によって指摘されている。この時期の日本列島北部は、考古学的には擦文文化から中世アイヌ文化への移行期に相当するが、そこでは異文化間の接触・融合と、それを契機とした社会変化が生じていたのである。具体的には、北海道の中央部で成立していた擦文文化が全道に拡散して道東北部のオホーツク文化を吸収し、中世アイヌ文化へ移行していくという変化である。このような激しい動きの背景には、交流・交易の発展を軸として高度な政治経済社会が急速に形成されてゆくという、東北アジア地域全体の広域変動があったと理解されている。研究代表者もその視点を意識しながら、これまでオホーツク文化と擦文文化の考古学的研究を推進してきた。

２．研究の目的

上記のような背景と経緯を踏まえ、本研究課題では、擦文文化から中世アイヌ文化への移行期の北海道における社会変動と、その背景となる環オホーツク海地域の交流の実態を考古学的に解明することを研究の目的とした。具体的には、擦文文化の社会構造と居住形態の研究と、擦文文化と周辺諸文化の交流の解明という二つのテーマを設定し、異文化接触による社会変化という視点から、中世アイヌ文化の成立過程の再評価を試みた。

３．研究の方法

擦文文化後半期の社会構造と居住形態の様相を具体的に明らかにするため、北海道北見市大島 2 遺跡にて擦文文化集落遺跡の発掘調査をおこなった。本遺跡は、海に面した高位段丘上という特異な場所に立地しており、生業や他地域との交流に関して、周囲の集落とは異なる性格を有すると考えられる重要な遺跡である。本遺跡では、平成 22 年度より代表者が所属する東京大学常呂実習施設が発掘を開始しており、擦文文化後半期の焼失住居跡を含む集落遺跡であることが判明していた。この調査を継続するかたちで本研究課題では竪穴住居跡の発掘調査を実施し、出土遺構と遺物の分析をおこなった。

調査は各年度の８月から９月にかけて常呂実習施設を拠点として実施した。出土遺物のうち、炭化植物種実や炭化木材については樹種同定や放射性炭素年代測定をおこなったが、これらの自然科学的分析については連携研究者・研究協力者の協力を仰いだ。

発掘調査と併行して、大島 2 遺跡の調査成果を他の資料と比較検討するために、基礎資料となる他の遺跡の擦文文化やオホーツク文化のデータを収集した。データの収集方法は、刊行されている発掘報告書を資料としたほか、北海道内やロシア極東の未報告の資料についても現地で資料調査をおこなってデータを得た。

以上の発掘調査と自然科学分析等に基づく本研究課題の成果については、最終年度に研究成果報告書を刊行し、詳細な内容を公開した。

４．研究成果

（１）発掘調査の概要

大島 2 遺跡の発掘調査では、1 号竪穴と 2 号竪穴の、2 軒の竪穴住居跡を完掘した。竪穴の時期は出土土器からみてどちらも擦文文化後期～晩期（紀元 11 世紀後半～12 世紀前半）であり、掘り上げ土の上下関係から 1 号竪穴が古く、2 号竪穴が新しいことが確認された。1 号・2 号とも廃絶時に火を受けた焼失住居であり、大量の炭化材が出土した。

1 号竪穴は 1 辺約 5m 前後の小型の竪穴住居跡で、カマドと炉が各 1 基ずつ付設されていた。出土遺物は擦文土器のほか、転礫を半裁したような黒曜石などが検出された。

2 号竪穴は 1 辺約 9m 前後の大型の竪穴住居跡で、2 基のカマドと 1 基の炉が付設されていた。出土遺物は擦文土器、フォーク状の木製品、海獣骨などが検出された。また、埋土からの出土であるがトビニタイ土器も出土している。

以下に、大島 2 遺跡の調査成果の詳細について項目別に述べる。

（２）竪穴住居の構造について

大島 2 遺跡の 1 号竪穴と 2 号竪穴は焼失住居であり、建築材とみられる大量の炭化材が遺存していたことから、住居の上屋や付帯設備を復元する上で有用なデータが得られた。柱穴の配置など、他のデータも踏まえて住居の構造について確認されたことをまとめると以下のようになる。

1 号竪穴では、太く長い丸太材が竪穴の中心に向かうようなかたちで検出されたが、これは屋根の垂木と考えられるため、上屋の形状は方錐屋根である可能性が高いことが判明した。また、幅が広く長い板材が床面よりやや上で検出され、その下部には焼土が遺存していたことから、屋根の裾部は土で覆われ、その上に板材が被せられた構造であったことが確認された。壁沿いに並ぶ小柱穴の配置からは、竪穴の隣り合う二辺の壁沿い、すなわち北西側と北東側の壁沿いにベンチ等の構造物が付設されていたことが想定された。

2 号竪穴では、壁際の床面直上を中心に大型の板材が出土したが、これはベンチ状の構造物もしくは床板の可能性が高いと考えられた。これらの板の方向を見ると、北西壁と南西壁では壁と平行、北東壁と南東壁では壁と直交する配置となっており、1 号竪穴と同様、壁際の構造物はＬ字形の配置（ただし向きは 1 号と 2 号で左右逆）となっていたことが確認された。また、2 号竪穴の西カマドでは、カマドの構築材となる粘土の中に、芯材

とみられる細い炭化材が格子状に重なって遺存している様子が確認された。

（３）住居の廃絶儀礼について

①焼失住居の出現率について

前述のように、大島２遺跡で調査した竪穴は２軒とも焼失住居であった。擦文文化の竪穴住居跡における焼失の割合は全道平均で15%前後とされるが、常呂川下流域の調査例をみると、常呂川を挟んだ東西の地点間で出現率に差がある。すなわち常呂川以西では全道平均以下であるのに対し、大島２遺跡を含む常呂川以東では 40%以上の高い出現率となる。このような地点差の背景は今のところ不明であるが、焼失という現象がもつ意味の解釈、すなわち、いわゆる「家送り」などの儀礼的行為とみなせるか否かとあわせて検討してゆく必要がある。

②黒曜石の破砕・埋納儀礼について

１号竪穴では、カマドのすぐ脇と柱穴内から黒曜石が１点ずつ出土した。擦文文化では黒曜石を儀礼に用いたとみられる痕跡がこれまでにも確認されており、具体的には、黒曜石を住居内に埋納する例、床面で破砕させる例、屋外で破砕させる例、墓に副葬する例などが認められている。これらの行為については、廃屋を墓とする「廃屋墓」での葬送儀礼とみなす意見もあり、大島２遺跡でも廃屋墓が採用された可能性を示すものとして注目される。

③海獣骨の配置について

２号竪穴では、２基のカマドのそれぞれ近くから、海獣骨が数点、意図的に置かれた状態で出土した。擦文文化の竪穴住居跡から出土する動物遺体としては、魚骨の検出例はあるが海獣骨の例はごくわずかであり、また意図的な配置例は確認されていない。一方、トビニタイ文化の竪穴住居跡では海獣骨の屋内配置の確認例があり、大島２遺跡の例はトビニタイ文化と関連する可能性がある。

（４）出土木製品について

２号竪穴では食器のフォークのような形状の木製品が炭化した状態で出土した。同様の木製品はこれまで擦文文化では確認されておらず、初の出土例となった。同様の形状の木製品については、本州の弥生時代や古墳～平安時代の例があるが、それらと大島２遺跡の例では形状がやや異なっており、直接的な関連を認めるのは難しい。形状が近いものとしてはサハリンアイヌの民族例があり、それは「アイヌ葱を煮る際に用いるフォーク」とされている。大島２遺跡の木製品の用途を考える上で参考になろう。

（５）自然科学分析の結果

２号竪穴の炉やカマドからは炭化種実が検出された。同定の結果、シソ属果実が最も多く、他にキビ、マタタビ属、ブドウ属、ニワトコ、アズキ亜属などが含まれていることが判明した。これらの種実は食用あるいは薬用として利用されていた可能性が高い。

建築材として用いられた木材についても樹種同定をおこなった。その結果、１号竪穴では垂木にトドマツ、キハダ、ヤマナラシ属が用いられ、板状の屋根材にはトドマツ、コナラ節が選択利用されていた。１号竪穴のこのような樹種構成は、擦文文化のそれよりもオホーツク文化の方にむしろ類似する傾向にある。２号竪穴では、ベンチ材もしくは床板となる大型の板材にトネリコ属が選択利用されていることが明らかになった。このような樹種構成は、これまでに確認されている常呂川下流域の擦文文化のそれと類似する傾向にあるといえる。

１号竪穴の出土炭化材については放射性炭素年代測定もおこなっている。測定の結果、年代は11世紀後半から12世紀前半の範囲内で、12世紀中頃の可能性が高いことが明らかになった。また、２号竪穴の出土土器については付着炭化物の炭素・窒素同位体分析をおこない、付着物に海洋性資源の影響がみられることが確認された。

（６）オホーツク文化・トビニタイ文化との関係について

上記の成果を踏まえて大島２遺跡の性格について評価するならば、最大の特徴と言えるのはオホーツク文化やトビニタイ文化との関連をうかがわせる特異な要素が確認されたことである。特にカマド近くへの海獣骨の配置と、トビニタイ土器の出土は、本遺跡の立地上の特徴とあわせて、オホーツク文化やトビニタイ文化との関連をうかがわせるものであった。また、１号竪穴建築材の樹種構成、土器付着炭化物にみられた海洋性資源の影響、焼失住居の出現率の高さ、フォーク状の木製品などについてもオホーツク文化やトビニタイ文化と関連する可能性が考えられる。大島２遺跡の性格がそのようなものであったとすれば、従来考えられていた以上にオホーツク文化からの要素が北海道東部の擦文文化に取り入れられ、それが 12 世紀まで維持されていたとする評価が可能となろう。これは中世アイヌ文化の成立過程を考える上で非常に重要な成果といえよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①<u>熊木俊朗</u>、オホーツク文化とアイヌ文化、季刊考古学、査読無、133 巻、2015、80-81

②榊田朋広、<u>熊木俊朗</u>、特集 2013 年の考古学会の動向　北海道　続縄文・擦文・オホーツク以降、考古学ジャーナル、査読無、No．656、2014、142-145

③<u>熊木俊朗</u>、オホーツク文化と周辺諸文化の交流、歴史と地理（日本史の研究）、査読

無、675巻、2014年、1-14
④熊木俊朗、北海道東北部の続縄文文化とサハリン・千島列島、Arctic Circle、査読無、No.86、2013、4-9
⑤熊木俊朗、香深井A遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年、東京大学考古学研究室研究紀要、査読無、26号、2012、1-38

〔学会発表〕（計5件）
①熊木俊朗、夏木大吾、中村雄紀、擦文文化竪穴住居跡の構造と廃絶儀礼について、第17回北アジア調査研究報告会、2016年2月28日、石川県立歴史博物館（石川県金沢市）
②熊木俊朗、夏木大吾、中村雄紀、北見市大島2遺跡、北海道考古学会2015年度遺跡調査報告会、2015年12月12日、北海道大学（北海道札幌市）
③熊木俊朗、國木田大、山田哲、2013年度北海道北見市大島 2 遺跡発掘調査報告、第15回北アジア調査研究報告会、2014年3月1日、札幌学院大学（北海道江別市）
④熊木俊朗、國木田大、山田哲、2012年度北海道北見市大島 2 遺跡発掘調査報告、第14回北アジア調査研究報告会、2013年2月9日、石川県立歴史博物館（石川県金沢市）
⑤熊木俊朗、國木田大、山田哲、2010・2011年度北海道北見市常呂町大島 2 遺跡発掘調査報告、第13回北アジア調査研究報告会、2012年2月12日、東京大学（東京都文京区）

〔図書〕（計4件）
①熊木俊朗（編著）、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設、擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動、2016年、119頁
②熊木俊朗（共著）、北海道出版企画センター、オホーツク海沿岸の遺跡とアイヌ文化、2014、172-188
③熊木俊朗（共著）、青木書店、講座日本の考古学3　縄文時代（上）、2013、601-625
④熊木俊朗・國木田大（編著）、東京大学大学院人文社会系研究科、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点、2012、388頁

〔その他〕
ホームページ等
東京大学常呂実習施設website
研究・資料＞発掘調査＞現在調査中の遺跡
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokoro/academic/excavation.html

６．研究組織
(1)研究代表者
熊木　俊朗（KUMAKI, Toshiaki）
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：２０２８２５４３

(2)研究分担者
大貫　静夫（ONUKI Shizuo）
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：７０１６９１８４
（平成24年度より連携研究者）

(3)連携研究者
佐藤　宏之（SATO, Hiroyuki）
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：５０２９２７４３

設楽　博己（SHITARA, Hiromi）
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：７０２０６０９３

國木田　大（KUNIKITA, Dai）
東京大学・人文社会系研究科・助教
研究者番号：００５４９５６１

夏木　大吾（NATSUKI, Daigo）
東京大学・人文社会系研究科・助教
研究者番号：６０７５６４８５
（平成27年度より連携研究者）

福田　正宏（FUKUDA, Masahiro）
九州大学・人文科学研究院・助教
研究者番号：２０４３１８７７

笹田　朋孝（SASADA, Tomotaka）
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：９０５０８７６４

(4)研究協力者
佐野　雄三（SANO, Yuzou）

守屋　豊人（MORIYA, Toyohito）

山田　哲（YAMADA, Satoru）

中村　雄紀（Nakamura, Yuki）

守屋　亮（Moriya, Ryo）